

寺町吟行

内藤 真理子

当ペンクラブの俳句の会に参加しているのだが、三月の句会はもうすぐで、近日中に句を五句提出することになっている。

常々気にかけて、小さなメモ帳を首から下げ、閃いた時はすぐに書けるようにしている。だがいくから見ても、一句も書かれていない。二月の句会が終わった後、我が句のあまりの下手さに、来月こそは精進するぞ！一日一句は作りた！と思っただけなのに……。

句が全く思い浮かばず情けない。かくなる上は吟行を！と、近くにある寺町通りにいざ出陣。

ここは、関東大震災の後に、浅草、築地、本所、荒川などにあつた寺院が集団で移転して来たそうで、烏山から久我山に至る一郭に寺が密集している。間を通る寺院通りの両側には大きな門構えの寺がずらりと並んでいて、「世田谷の小京都」と呼ばれ「せたがや百景」にも選定されているようだ。

久我山方面から行くと、最初に高源院がある。ここは秋になると様々な鴨が飛来してくるのでも有名。シベリアから最初の鴨が渡って来た時、季節の映像としてテレビで取り上げられたことがある。

今はひっそりとしていて、掃き清められた門内には、切り揃えられた満開の白梅が何本か……控えめに迎え入れてくれる。それを見ながら池の方に行く細い道に入ると椿が小さな花をつけている。そして弁天池。真つ赤な橋の欄干と、浮御堂の赤い出入り口が周囲の緑を映した静かな水面に鮮やかに色を添えている。

平日の午前中という事もあって誰に逢うこともなく寺院通りを進む。

しばらく行くと「喜多川歌麿の墓」と書かれた墓が、専光寺と書かれた寺の門前にある。中に入ると歌麿の墓と思しきものがもう一基。門前のは看板なのだろう。何と言っても、喜多川歌麿は寺院通りでは有名人だから……。

寿福寺は立派な門構えと大きな瓦屋根で、寺の中には電線など一切なく、時代劇の中に迷い込んだ気分だ。

『竹の秋 寺の裏手に カサカサと』

寺の片隅の竹林で詠んだ句を小さなメモ帳に書きとめた。